

## 政治的要求の出現過程について

平 尾 三 郎

### 1. 共同目標, 同一目標, 共通目標

政治とは、一個人または一集団のみでは実現不可能な、あるいは実現困難な利益を、他の個人または他の集団との協力によって実現可能にし、あるいは実現をより容易にするために、行なわれるものである。そしてその具体的内容は、複数の個人または集団のあいだで対立する利益を調整して共同目標を設定し、その共同目標を実現するために必要な協働行為を管理することである。<sup>(1)</sup>

しかし、このような概念規定を行なっただけで、政治が理解できるものではないことはいうまでもない。たとえば、「複数の個人または集団のあいだで対立する利益を調整して」とひとことでかたづけているが、政治の実際において、とくに価値観が多様化、複雑化し、同時に主権意識がたかまって政治的主張に多くの人々が積極的になっている現代社会においては、ありとあらゆる利益が政治の場にもちこまれ、その調整は多くの人々に絶望を感じさせるほど、困難となっている。また価値観の多様化は、政治手段に訴えなくても実現できる利益、あるいは政治手段に訴えても実現できない利益なども生みだし、このような利益に重大な関心をもつ人は、政治に関心をもたなくなっている。このような脱政治的(depolitical)、反政治的(antipolitical)あるいは無政治的(apolitical)な政治的無関心がたかまっている今日、「利益を調整する」ために問題となるさまざまな点を、より詳しく探求する必要がある。

とくに、一面では上述のような困難が増大しながら、逆に社会の専門化と有機化

がすすんでいる現代においては、われわれの生活は「他の個人または集団との協力」なしにはなりたない。そして利益の調整の困難さに絶望したり、あるいは他の利益追求のみに没頭して政治的決定を一部の人間にゆだね、民主主義から逃避することの危険を、過去のいくたのながい経験から、われわれは知っている。さきの政治概念のなかで「共同目標」ということばを使ったが、共同目標のなかには、「集団のすべての成員が平等に報酬を享受できるような方向」<sup>(2)</sup>できめられたいわば同一目標と、「〈勢力関係〉において上位にある者に特に報酬が大きくなるような方向」<sup>(3)</sup>できめられたいわば共通目標とが含まれている。たとえば古代ギリシャにおいてピラミッドの建設に従事した人々にとって、ピラミッドの建設は王にとっても奴隷にとっても共同目標であり、共通目標ではあったが、奴隷にとってそれは苦難以外のなにものをも与えるものでなかったから、決して同一目標ではなかった。この例でも明らかなように、「共同目標を設定」といっても、可能なかぎり同一目標的なそれに近づける努力をわれわれはなさなければならないであろう。

それでは、どうすれば同一目標的な共同目標を設定することができるであろうか。常識的にいえば、それは国民の政治的要求を基礎にし、それにもとづいた民主的な議論ののちに民主的な決定を行なえばよいということになる。しかしこのようなことは、これまでいい古されてきたことであるにもかかわらず、現実にはなかなかそのとおりに実行されていない。そこで以下、そもそもわれわれが表明する政治的要求とはどのようなものであろうか、それが表明されるに至るまでに、各人の心のなかでどのような過程をたどるのかといった点に焦点を合わせて、考察をすすめたい。

(1) この政治概念については、未発表拙稿「政治の概念」で考察した結論であるが、未発表であるため、次の書物を参照されたい。Bernard Crick, *In Defence of Politics*, London, 1962. 邦訳、前田康博訳「政治の弁証」(岩波書店)。とくに第一章「政治による支配の特質」。

(2) 作田啓一「価値の社会学」(岩波書店) 53頁。

(3) 同上。

## 2. 私的利益，公的利益，国家

冒頭の政治概念をさらに詳細に理解するために、まず利益について考察してみよう。政治に関連してよく問題にされるのは、私的利益（特殊利益）と公的利益（一般利益）との背離である。たとえば、重要な道路の建設という公的利益のために、わが家のたちのきといった私的利益の損失をしいられるといった身近な問題から、国家のために生命を賭して戦争に参加するといった極限的な例にいたるまで、さまざまな具体例が存在する。とくに、公的利益のために私的利益がたえしのぶことができないほど犠牲にされたり、あるいは一部の人間が多くの人々の利益を犠牲にしてみずからの利益を実現するために、公的利益の名をかたったりすることがしばしばあるために、この公的利益と私的利益の背離がよく問題にされている。

しかし、なにが公的利益であり、なにが私的利益であるか、それを区別するものはなにかと考えると、ことは簡単ではない。

たとえば、ある共同体において多数を占める成員によって利益と感じられるものが公的利益であろうか。前述の例のように、一本の道路の建設によって利益を受ける人数がより多ければ、その道路建設は公的利益であり、道路の建設によって損害を受ける人数が相対的に少数であれば、道路建設に反対するのは私的利益のためということになるのであろうか。

たしかに一部の人は、存在するのは私的利益であって、「全般的に包括的な利益」<sup>(4)</sup>などは存在しないとし、政治過程を利益集団の力関係、均衡関係によって説明しようとする。<sup>(5)</sup>このような、いわゆるインタレスト・ポリティクス、あるいは圧力政治は、力関係が暴力によってでなく多数決によって表明されるかぎりにおいては、一応、成員の政治的要求と政治的行動を基礎として政治が動いている点において、のぞましい政治とみることもできよう。

しかし、すでにたびたび指摘されているように、このようなインタレスト・ポリティクスにおいては、一部の組織集団（たとえば経営者団体、軍部とい

ったような)が過度の権力を手中にして全体を支配する危険がきわめて強い<sup>(6)</sup>。あるいは逆に、たとえば身体障害者のような人数からすれば相対的にごくわずかの、しかし切実さからすればきわめて強い要求をもった人々の利益は、しりぞけられてしまうであろう<sup>(7)</sup>。さらにまた、利益がきわめて多様化した現代社会において、普通の人々はとくにどれかの利益に切実さを感じる事が少ない。また利益体系の多様化は人々をさまざまな利益ごとに分断して、大衆的な利益集団の力の低下、逆に特定集団の力の相対的上昇をもたらす。

このようにインタレスト・ポリティクスは、たとえ制度的に民主的であったにしても、結果的には一般大衆の利益ではなくて一部の人間の利益に役立つものであり、実質的には非民主的とならざるをえない。私的利益と公的利益の相違を、たんなるそれを利益と感じる人々の人数の差に求めたり<sup>(8)</sup>、あるいは公的利益を私的利益の算術的な総計とみたりしてはならないのである。

それでは公的利益とは、前述の例のように、私的利益の根源である自己の生命をなげうってまで他国による侵略から自国を守るようなことなのであろうか。私的利益とは無関係に、あるいは私的利益と矛盾対立するものとして、公的利益は存在するものなのであろうか。

私的利益追求のためのホッブスのいう「万人の万人に対する闘争」が生みだす不安、敵意、混乱から個人的生存を保障するために、そして人間社会の平和を維持するために、私的利益よりも共同体維持を基本目標とする公的利益を優先させなければならないという考えかたは、たしかにこれまでも存在してきた。しかしこのような考えかたは、ともすれば現実の政治過程から遊離した政治哲学的な議論にながれてしまったり、あるいは、われわれ日本人がかってにがい経験をしたように、公的利益の名のもとに一部の人間が多くの人々の利益を犠牲にしてみずからの利益を実現するためのかくれみのに利用される危険をとまなっている。したがって、公的利益と私的利益とを矛盾対立するものとしてとらえ、理念的抽象的に、公的利益は私的利益に優先すべきものであると簡単にいってしまうわけにはいかない。それでは、公的利

益と私的利益との関係をどうとらえればよいのであろうか。

この問題について示唆にとんでいるのは、ジョン・デューイの理論である。<sup>(9)</sup>  
デューイは、人間は客観的にも主観的にも社会的動物であり、「人間が信じ、希望し、目的とするものは連合関係と相互交渉の所産である<sup>(10)</sup>」というところから出発する。このような人間の集合的行為には二つの種類があり、一つは集合的行為に直接従事する人々にのみ影響を及ぼすものであり、もう一つは、直接的に関係した人々を超えて第三者に影響を及ぼすものである。デューイは前者を私的な行為、後者を公的な行為と考える。私的な行為における利害とその規制はその行為に直接従事しているものに限定されるが、公的な行為においては、行為の遂行に直接参加しなかった人々にまで利害は及び、またそのような人々にまで規制は及ぶのである。このような間接に影響を蒙る人々の集団を、デューイは公衆とよぶ。

このデューイの公衆の定義をかりて公衆の利益を公的利益とするならば、公的利益は私的利益追求のための行為に直接参加している人々以外の、それによって間接に影響を受ける人々をも含めた利益ということになる。そして公的利益は、行為に直接参加していない人々の利益であるため、特別な代行者＝公職者の存在を必要とする。たとえば、失業者の存在は資本主義社会においては、企業による利潤追求活動によって生みだされている場合がほとんどであろう。しかし資本主義社会が私的な利潤追求行為を認め、契約の自由をうたっている以上、企業は失業者の存在に対してなんらの救済の責を負っていない。現に企業に籍をおいていてこれから首を切られる場合は別として、すでに失業していてどこの企業にも籍をもっていない者がどこかの企業に対して雇用を要求しても、企業の方に雇用の意志がないかぎり、ほとんどそれがいれられることはないであろう。結局このような失業者は、公的利益を目標とした公共政策にのっとり、公的機関が救済する以外に方法はない。デューイはそこに国家の機能を認め、「国家とは、その構成員によって共有されている利益の保護に任ずべき公職者を通じて作り出された公職の組織である<sup>(11)</sup>」

と定義した。

しかし、以上のように公的利益を説明しても、具体的に何が公的利益であるかは、非常に判断が難かしい。時代を超えて存在する普遍的な公的利益なるものは、理念のうえでは存在しえても、現実の政治的目標としては定立しえないであろう。デューイのいうように、公的利益の根源には人間の連合関係があり、その連合関係は時々刻々と歴史的に変化していつていることはいうまでもない。したがって公的利益もそれにつれて変化するのである。古代の農耕民族にとっては灌漑治水が最大の公的利益であり、その実現のためには、専制君主によって支配されるものであっても、国家が必要であった。しかし今日の公的利益、すくなくとも最優先されるべき公的利益は、灌漑治水ではもはやない。人間の「結合された活動には無限の形態があり、したがってまたそれに対応して多様な諸結果が存在」<sup>(12)</sup>するのであるから、さまざまな公的利益が発生し、さまざまな国家が出現するのは、いわば当然なのである。

歴史的に変化発展していく人間の社会関係のなかで、多くの人々の同意する公的利益を定立することは非常に難かしい。多くの人々のなかでは、ある人にとっては公的利益と認識されるものであっても、他の人にとっては公的利益と認識されないといった場合も存在しよう。ある人にとっては最優先されるべきと考えられる公的利益が、他の人にとっては二次的三次的意義しか認められないといった場合も存在しよう。こういった多様な人々のあいだで公的利益についての認識を一致させ、目標を一致させるという困難な課題を達成するためには、デューイのいうように、「集団を形成している個々人の行動の諸結果を認知し、認識し、かつそれらの源泉と起源とにまでさかのぼって追求する能力を要求する。それは、これらの諸結果を認知することによって創造された諸利益の代表者として奉仕する人間を選任し、また彼らが手に入れ、かつ使用するであろう機能を限定することを含んでいる。それは政府の制度について、これらの諸機能の行使に伴う名声と権力とを保持する人々

が、それらを公衆のために用い、彼ら自身の私益のためには転用しえないような制度であることを要求する<sup>(13)</sup>といえよう。

では、「集団を形成している個々人の行動の諸結果を認知し、認識し、かつそれらの源泉と起源とにまでさかのぼって追求する能力」とは、具体的にどのような能力であろうか。

- (4) D. Truman, *The Governmental Process*, New York, 1951, pp.50-51.
- (5) 著名なのは Ibid.のほか、A. F. Bentley, *The Process of Government*, Evanston, 1949. E. Latham, *The Group Basis of Politics*, New York, 1952. 等。
- (6) この点をとくにアメリカに関して明らかにしようと試みたのが、拙稿「黒人問題とアメリカの政治構造」（経済評論，昭和42年10月号）。
- (7) 成田空港問題でこの点を提起したのが、伊東光晴「経済学は現実に対応できるか」（世界1971年7月号）
- (8) Redford は利益の量(quantity of interest)と利益の密度(intensity of interest)とを分け、利益の密度に注目すべきであるとしている。E. S. Redford, *Democracy in the Administrative State*, New York, 1969, pp.17-19.
- (9) John Dewey, *The Public and its Problems*, 1927. 邦訳、阿部齊訳「現代政治の基礎——公衆とその諸問題——」（みすず書房）にまとめられている。
- (10) Ibid. 邦訳、30頁。
- (11) Ibid. 邦訳、38頁。
- (12) Ibid. 邦訳、38頁。
- (13) Ibid. 邦訳、37-38頁。

### 3. 欲求，価値，政治的欲求

ここで触れなければならないのは、行為の要因としての欲求と価値との関係をどうとらえるかということである。この両者の関係についての一つの見解は、「欲求の充足を抑えることで到達したものが価値である<sup>(14)</sup>」というような、相互否定的な関係にあるとするものである。たとえば自動車を買うためには、その代価を支払うために労働が必要であり、労働は休息や遊びの欲求を否定する。あるいは自動車を買うためにたとえばステレオを買いたいとい

う他の欲求を抑えなければならない。したがって自動車は価値をもっている。ところがたとえば空気は、ふつうなんらかの欲求の犠牲を必要としないから、価値をもたないということになる。

この禁欲によって価値が発生するという考えかたを、消費財を犠牲にして生産財を優先させることによって経済成長を速めようとする資本主義の発展段階に相応するものなどと簡単に見すごしてはならない。たしかに太平洋戦中の「欲しがりません勝つまでは」という標語のように、国家の維持発展に一義的な価値を求め、そのような大義名分によって個人の生活を犠牲にするために好都合な考えかたではあろう。しかしこの欲求と価値とのとらえかたは、もっと深い考察に根ざしている。

たとえば作田啓一は、個人は欲求の充足にあたって他者とかけ合いをもち社会関係を結ぶに至るが、この社会関係を維持、恒常化するためには、当事者の満足の度合、あるいは努力と報酬が平衡化されねばならない。したがって当事者の欲求には一定の限界が必要であり、当事者のあいだで共有価値が認識されなければならないとし、したがって価値は欲求の抑制をとともなうとしている<sup>(15)</sup>。この考えかたは、前述の公的利益と私的利益の関係のとらえかたとかなりの共通点をもっている。つまり公的利益は価値の実現であり、私的利益は欲求の充足であるといいかえることもできそうである。

しかしこの見かたには、二つの点から疑問が生じる。一つは欲求の抑制にのみ価値を認めて欲求の充足に価値を認めないのはおかしいという点である。たとえばなんらの人為的な工作が加えられていない自然の美が、われわれの美的欲求を充足させてくれることはよくあることである。そしてこの自然の美に人間の労働が加えられていないからといって、つまりなんらかの欲求の犠牲が伴っていないからといって、この自然の美に価値がないということではできるであろうか。この自然を開発して得られる他の欲求の充足を犠牲にしているから価値があるなどというこじつけ的な評価をせずに、欲求の充足そのものに価値を認めるほうが、より自然なのではないであろうか。



もう一つの疑問は、価値の実現によって充足される欲求があるのではないかという点である。人間の欲求のなかには、後でのべるように、たんなる生理的な欲求だけではなく、他のさまざまな欲求がある。その欲求のなかには、自分が価値を認めたものを実現した時に得られる満足感も含まれるのではないであろうか。であるとするならば、欲求の充足と価値の実現が両立することもありうるということになる。

これらの疑問が生じる第一の見かたは、一応個人の欲求の充足を出発点としながら、個人の欲求を抑制するところに価値を見出すものであったが、第二の見かたは、「価値を主体の欲求をみたす客体の性能<sup>(16)</sup>」に求める。この見かたからすれば、さきに例にあげた自然の美は、それを見る人の美的欲求をみたす性能をもっているから価値があるということになる。第一の見かたと第二の見かたは、言葉のうえでは、欲求を抑えるものとみたすものと正反対の言葉を用いているが、内容は正反対でまっこうから対立するものではない。両者の相違は、欲求をどうとらえるかについての相違から発生している。前者は、たとえば次の文章に明らかなように、欲求を人間の生物的な本能にねざすものと非常に狭くとらえている。

よく知られているように、人間の生活は文化(culture)と呼ばれるさまざまな行動様式に従って営まれている。道具や言語の使用法、技術や科学的知識、人びとのあいだの交渉のあり方を規制する各種の慣習、それらが体系化され、強い拘束力をもつに至った法律、善悪を分かち内面的な規準としての道德、人間の感情を生命体のリズムに即して表現する芸術、人生の究極の意味に従ってものごとを位置づける宗教など。これらやその他の項目を含む文化は、もともとは人間の生物学的素質から発生してきたとしても、社会生活を通じて伝承されているうちに、反射的な、あるいは本能的な行動様式からしだいに遠く離れていった。そしてわれわれがしばしば経験するとおり、文化の様式に従うと、特定の時と場所においては、有機体にねざす欲求のたちどころの充足を断念しなければならない。たとえば食事や睡眠の欲求が毎日のスケジュールによって充足の時間を区切られているように。こうして文化と欲求とは対立する。ある

いは欲求は文化の制限をと<sup>(17)</sup>おして充足される。

これに対し、価値を主体の欲求をみたす性能とみる見かたは、欲求をより広くとらえている。たとえば、上記の引用文においては欲求と対立するものととらえている文化をも欲求の対象に含め、欲求を生理的なないし生得的な欲求と文化的ないし習得的な欲求とに二分する考えかたも存在する。たとえばフロムは、飢えと食欲とを区別し、次のようにその差違を生理的欲求と文化的欲求との差異であるとした。

激しい飢餓というような生理的な欲求を満たすことは、それが緊張を解いてくれるから快いのである。食欲の満足から生ずる快樂は、飢えの満足から生ずる快樂と質的に相違する。食欲は、喜ばしい味覚経験に対する期待であり、飢えとは異って、緊張を作り出すことはない。この意味において味覚とは、音楽や芸術的な趣味と同じように、文化的な発展と洗練とによって産出されるものであり、文化的な意味においても心理学的な意味においても、それは豊饒な情<sup>(18)</sup>況においてのみ発展しうる。

欲求を生理的欲求と文化的欲求とに二分することがよいか悪いかは別として、欲求を生理的欲求にとどまらせずにより広義にとるならば、欲求と価値とは相互否定的な関係にあるものではなくなり、たとえば生理的欲求を充足するものにも、次の文のように価値を認めることが可能となる。

人間は生きるために生存の手段的価値（生活の糧）を必要とし、また、生きがい（生きることの意味づけ）を求める。前者の欲求の対象を福祉価値（welfare value）とよぶ。安全・富・技能・健康などはその代表的な価値であり、そのシステムが利益体系（interest system）である。後者の欲求の対象となる価値は、名誉価値（deference value）とよばれる。権力・地位・愛情・徳義<sup>(19)</sup>などはその例であり、多くの文化では信条体系として一つの型をもっている。

政治において実現しようとする利益は、たとえ公的利益であるからといって、生理的欲求の充足を排除してしまうわけにはいかない。人間の生理的欲求といえども、状況によって、複数の人間の協働によってのみ充足できたり、

あるいはまたより容易に充足できる場合があるとすれば、生理的欲求を価値なきものとして政治の対象外とすることはできない。したがって、欲求を広義にとり、多様な欲求をみたす客体の性能すべてに価値を認める見かたの方が、より現実適合しているといえよう。

以上のように広義に欲求をとらえ、それをみたす対象を価値とするならば、政治的行為の起源は人間の欲求にあるということが出来るであろう。もっとも政治の定義からいって、すべての欲求が必ず政治的行為を生みだすわけではない。個人の努力のみによってみたされる欲求は、政治的行為を生みださない。複数の人間の協働によってみたされる、あるいはより容易にみたされる欲求が、政治的行為を生みだす。この欲求を政治的欲求と名づけよう。

(14) 作田啓一，前掲書，15頁。

(15) 同上，39－41頁。

(16) 見田宗介，「価値意識の理論」（弘文堂）17頁。

(17) 作田啓一，前掲書，14頁。

(18) E. Fromm, Man for Himself, New York, 1947. 邦訳，谷口隆之助，早坂泰次郎訳「人間における自由」（東京創元社）217頁。

(19) 篠原一，永井陽之助編「現代政治学入門」（有斐閣），7－8頁。

#### 4. 政治的要求，意識的要求

政治的行為の起源が政治的欲求であるからといって，各人のもっている多種多様な政治的欲求が，すべて政治過程に投入されてくるわけではない。政治的欲求のなかには，それが欲求として意識されないために，政治過程に反映されない欲求もあろう。たとえば，封建時代の農民にとって，小作制度の廃止はきわめて強い政治的欲求であったであろうが，しかし大部分の農民にとってそのような欲求はまったく意識の外にあったがために，現実の政治過程では特定の地域，特定の時代を除いては，まったく問題にならなかった。このようないわば潜在的欲求が現実の政治過程になんらの影響を及ぼさないからといって，これを無視してしまうわけにはいかない。現実の政治過程の第三者的解釈でことたれりとする者ならば，それを無視して実際に政治過

程に作用、反映している政治的欲求がなんであるかのみを理解すればよいであろう。しかし、現実政治の解釈ではなく、そのより理想的なありかたを追求しようとする者は、なんらかの原因で潜在化しているがそれを顕在化すればより理想的な方向へ政治を動かすような政治的欲求が存在しているかどうか、どのような理由でそれが潜在化しているのか、どうすればそれを意識化、顕在化できるかということに関心をもたざるをえないであろう。

以上のような理由から、政治的欲求のなかに、現実の政治過程には影響を及ぼしていない潜在的な欲求を含めることにするが、しかし政治が相異なる利益を調整して共同目標を達成するものである以上、現実の政治過程に投入されるのは、なんらかの形態で表現された欲求でしかありえない。意識されず表現されない欲求は、調整の対象とはなりえないからである。なんらかの形態で表現された政治的欲求を、政治的要求と名づけることにする。

そこで問題になるのは、さまざまな政治的欲求のなかから、限定された政治的要求が出現してくるメカニズムである。たとえば、公害追放という政治的要求を主張する人は、なぜその他のたとえば物価上昇阻止とか、だれもが自分の家をもてるような土地政策をとった政治的欲求がありながら、それらを二のつぎにして公害追放を政治的要求として掲げたのであろうか。そのメカニズムを明らかにすることによって、なぜ多くの人々のあいだで相異なるさまざまな政治的要求が現われてくるのか、そしてそれらを調整して共同目標を設定するにはどうすればよいかが、明らかになるであろう。

これまで、さまざまな欲求のなかの優先順位については、生理的欲求が基本であり、それ以外の欲求は生理的欲求の充足の次に出現する二次的なものであるという見解が、多くの論者によって主張されてきた。たとえば、マズローの次の文はその一つである。

人間がパンのみによって生きているということは、パンのないときには事実である。しかし、パンが豊富にあり、人間の食欲がいつも満足されている場合には、人間の欲望はいったいどうなるであろうか。

すぐに他の(より高次の)欲求が出現し、生理的空腹よりも優位にたつ。また、そのような欲求が満足されると、再び新しい(より高次の)欲求が出現する。……満足感は相対的にいって生理的欲望支配から有機体を解放するのに役だち、したがってより社会的な目標の出現を可能にするからである。<sup>(20)</sup>

もしこの仮説が正しいとするならば、まず生理的欲望を充足しなければ、文化的社会的な欲求は出現してこないということになり、政治においても、まず政治的欲望として現われるのは生理的欲望であるということになるであろう。この仮説によれば、誰にとっても同じように機械的、図式的に欲求は段階的に変化して行き、欲求に相違が起るとすれば、それは各人の欲求の段階の差にすぎなくなってしまう。

しかし、生理的欲望こそが一次的、基本的なものであるという仮説は、今日では否定される方向に向っている。たとえばリントンは、「生理的欲望は疑いもなく進化の過程一般を通じてみても個人の生涯をとりあげてみても、最初に現われるものであるが、成人の行動の動機としては、生理的欲望と心理的欲望とはまったく均等の位置にあると思われる。この両者が長い連続的な葛藤を続ける場合には、生理的欲望の方に勝目があるが、肉体的な要求が必ず勝つと断言することはできない<sup>(21)</sup>」とのべ、友情や主義のために死を賭ける場合を例にあげている。

たしかに、「武士は食わねど……」のことわざのように、生理的欲望を抑えて名誉、権力、理想、金銭などを優先させる生きかたが存在する。したがって、政治においても、生理的な欲求がまず政治的要求となって現われてくるということとはできない。必ずしも生理的要求=身近な要求とはいえないが、組織論としてまず身近な要求をとりあげ、その積上げのなかからより大きな、より根本的な政治的要求を引きだそうという考えかたも、正しいとはいえない。身近な要求を実現しなくても、より大きなより根源的な要求にもとづいて組織化を進めることも可能だということである。

さまざまな政治的欲望のなかから特定の政治的要求が抽出されてくるメカニズムが、このように機械的図式的なものでないとするならば、それではどう

とらえればよいのであろうか。

ここで政治的要求を大別してみると、三つに分けられると思われる。第一は衝動的な要求である。これはある一つの感性的な衝動のおもむくがままの要求であり、非常に緊迫した状態、あるいは群集心理にかられた場合などに、出現しがちである。たとえば、デモ隊と機動隊が衝突した場合などに、「機動隊を殺せ」などという要求がデモ隊のなかから自然発生的に起ってくるなどが、その例である。この衝動的な要求は、感情のおもむくがままの要求であるだけに、生理的、本能的欲求があらわれてくることが多い。衝動的な要求は、緊迫した状況のなかでは思わぬ重要な結果を生みだすこともあるので無視するわけにはいかないけれども、この要求はおおむね一時的なもので、時の経過にしたがって消滅したり他の要求に変容したりする。たとえば先の例で、実際に機動隊員におそいかかってこれを殺傷するといった思わぬ重要な事態をひきおこすこともありうるが、間もなく冷静になると「機動隊員を殺せ」といった要求にかわって、たとえば機動隊による過度の規制反対、あるいは表現の自由への侵害反対といった要求が現われてくるであろう。このように、衝動的な要求は重大な結果を生みだすこともありうるが、きわめて一時的なものであるという理由で、これ以上の考察を省きたい。

第二の政治的要求は、習慣的な要求である。同様な状況において同様な欲求が発生すると、意識的な評価、選択、決断の過程が省略されて、政治的欲求と政治的要求とのあいだに無意識的短絡が行なわれる。たとえば、今日大都市においては、家庭にゴミがたまったらゴミを集めにきてほしいという要求を簡単に電話などで提出している。しかし、一昔前、とくに農村においては、ゴミは自分で処理すべきものであって政治的要求の対象とは思われなかった。ゴミ処理が政治的要求となった最初においては、その欲求を要求として表現するかどうかについて、意識的な評価、選択、決断の過程がとられたにちがいない。そしてそれがたびたびくりかえされるなかで、その過程が省略されて、ゴミは公共機関を通じて処理すべきものであり、ゴミがたまったらばと

りにくるよう要求するのが当然だという考えかたが定着していったとみることができよう。

われわれ人間は、たしかに「個人の神経の消耗を避け、情緒的な緊張を和<sup>(22)</sup>げる」ために、習慣的な行動をとりがちである。たとえばリントンは、その点について次のようにのべている。

反応は、発展し組織される過程にあるものと、完全に組織され自動化されてしまったものに分けられると思う。前者は後者に向って移行するものであるが、この系列の両極の位置は明瞭である。これを尺度によって示せば、発生的反応の方の末端には、新しい不慣れな状況によって喚び起される行動が位している。この種の行動は、通常試験的実験的なものであって、未だ一貫した組織や型をもっていない。一方、その尺度の既成反応の方の末端には、見慣れた状況によって惹き起される行動が位している。これらの行動は、すでに完全に組織化され、一つの型をなしている。そして、発生的反応が常に状況に対するなんらかの程度の意識と、その状況が提示する課題を解決しようとする努力とを伴うものであるのに対して、既成反応は自動的であり、状況の登録やそれに結びついた行動が意識の面にまで達することなしになされるのである。<sup>(23)</sup>

たしかにわれわれは習慣的な行為をとりがちであるし、またそれなしにはわれわれはたえざる努力と緊張を強いられるわけであるけれども、しかし、このような習慣的な行為形態のみにわれわれは従っているわけではないし、またこのような習慣的行為形態にのみ従っていては、結局既存の体制から一歩も踏みだせないことになってしまう。さらにまた、リントンもいうように、習慣的行為といえどもそれが習慣として意識の底に沈澱する前には、意識的な評価、選択、決断の過程が存在したわけである。

そこで第三の政治的要求である意識的要求が重要な意味をもってくる。この意識的要求は、衝動的要求を一時的な感情的興奮ののちに修正あるいは否定するものとして、あるいは習慣的要求が定着する前の段階でそれを形成し、それに移行するものとして、重要である。しかしそれだけではなく、政治が

目標追求行為である以上、目標を意識的に理解把握し、その目標実現のためのもっとも有効な手段、方法を合理的に探索し、そのうえでこれを政治的要求として表明することは、共同目標を定立するうえでも、あるいはその目標を実現するための協働行為をすすめるうえでも、より大きな効果をもたらすであろう。

それではこのような重要な意味をもつ意識的要求は、どういう過程を経て形成されるのであろうか。

その考察に入るまえに一言触れておきたいのは、政治的要求を衝動的要求、習慣的要求、意識的要求の三つに大別したけれども、これらはあくまで理念型であって、現実に見われてくる政治的要求は、ほとんどすべてこれらの混合形態であるということである。衝動的要求といっても、まったく習慣や意識が作用しないことはありえない。たとえばさきのデモ隊と機動隊の衝突の例でも、デモ隊がいくら興奮して感情的になっていても、機動隊に危害を加えればどういう結果になるかを意識しない者は少ないであろう。また、機動隊に対して闘いを挑むことを習慣的に避ける者もいるであろう。このような意識的、習慣的要素が若干作用しながら、しかし全体的には衝動的要素が一番濃厚であるから、衝動的要求とよぶのである。

また意識的要求といっても、そこにまったく習慣的なものが含まれていないということもありえない。のちに詳しくはのべるが、われわれの意識はその時代、その社会個有の文化の影響を免れることはできず、そして文化とは世代から世代へ、個人から個人へと無意識的、習慣的に受継がれていくものといえるからである。

このように、衝動的要求、習慣的要求、意識的要求は混合しあい、相互作用しあっているわけであるが、そのなかでもっとも重要な意味をもっている意識的要求の形成される過程について、考察を進めよう。

- (20) A. H. Maslow, *Motivation, and Personality*, 1954. 邦訳、小口忠彦監訳「人間性の心理学」（産業能率短期大学出版部）、93頁。



- (21) R. Linton, The Cultural Background of Personality, 1935. 邦訳, 清水幾太郎, 犬養康彦訳「文化人類学入門」（東京創元社）19頁。
- (22) 同上, 120頁。
- (23) 同上, 119-120頁。

## 5. 政治的要求, 価値判断, 状況判断

すでにのべたように政治的要求とは、意識されているものも意識されていないものもあるさまざまな政治的欲求のなかから選びだされ、なんらかの形態で表現された政治的欲求である。そして意識的要求とは、その選びだされる過程が衝動や習慣によらず、意識的、理性的、合理的に行なわれるものである。

しかし、意識的、理性的、合理的とのべたが、その具体的内容はなんであろうか。それは大別すると二つに分けられると思われる。一つは価値判断であり、もう一つは状況判断である。

多様な政治的欲求のなかから一つの、あるいは若干の政治的欲求を選びだし、これを政治的要求として表現する際に、多数の欲求のなかでどれが一番価値があるのかという判断が加えられることは、いうまでもないことであろう。くりかえす必要もないと思うが、ここでいう価値とは、欲求の抑制によって到達したものを意味するものでなく、主体の欲求を充足する客体の性能という意味での価値であり、したがって価値判断とは、一つはどの欲求の充足をより優先させるかという欲求の順位づけと、もう一つは客体の性能がどの程度欲求を充足するかという性能評価との二つを含むことになる。たとえば、自宅の前の道路を舗装してもらいたいという政治的欲求と、空気の汚染をなくしてほしいという政治的欲求とのどちらの欲求を優先させるかというのが一つの価値判断であり、また、空気の汚染をなくすのに、工場の移転が一番効果があるのか、公園を造成するのが一番効果があるのかというのも一つの価値判断である。

このような意味での価値判断は、たしかにわれわれが政治的要求を意識的、

理性的、合理的に行なう際に、必ずといってよいほど行なっているであろう。しかし、それでは価値判断だけで政治的要求を抽出しているかといえば、それはそうではない。たしかに過度に理想追求的動機が強い人々や、政治的に未熟な人々などのあいだでは、自分が価値を認める政治的欲求をがむしやりに主張するということはよくみられることである。しかし多くの人々は、価値判断だけでなく、もう一つの要素である状況判断を並行的に行なって、政治的要求を抽出しているのである。

ここでいう状況とは、われわれが欲求を充足するために環境に働きかけ、そして逆に環境に規制されるが、そのような志向と関心とをもってみた環境の意味的側面である。たとえば、われわれがヴェトナムでの戦争をやめさせたいという政治的欲求をもち、価値判断のうえでもこの政治的欲求を最優先させるべきであるという結論がでて、われわれはそれを政治的要求とすることはかぎらない。というのは、そういう欲求を充足するという志向と関心をもって環境を眺めた場合、たとえば南北ヴェトナム、アメリカ、中国、ソ連などの関係が複雑にいくんでいて、早急に解決の見通しがたたないと判断されたり、あるいはヴェトナム戦争をやめさせるためには多くの人々の協力が必要であるが、他の人々がほとんどこの問題に無関心で同意や支持が得られないと判断される場合、つまり欲求充足の実現性がきわめて薄いと判断される場合、われわれはこの政治的欲求を政治的要求とはしないのである。

状況とは、上にのべたように、たんなる環境ではない。欲求を充足するために環境に働きかける主体によって、そのような志向と関心とをもって見られた環境である。そういった意味で状況にはきわめて主観的な要素が入りこんでくるし、またきわめて流動的である。状況の流動性は、以下の四つの要素から発生するものである。

第一は、主体の欲求の変化、つまり志向と関心の変化である。これが変化することによって状況ならびに状況判断が変化する。たとえば、物質的繁栄という欲求を優先させた場合の今日の日本の状況は、かなりよい状況である

といえるかもしれないが、公害をなくすといった欲求を優先させた場合の状況は、きわめて悪いといわざるをえないであろう。

第二の要素は、働きかけられる環境の変化である。環境それ自体が変化すれば状況も変化することは、これ以上あらためて説明するまでもない。第三の要素は、協力して環境に働きかける他の人々の変化、および他の人々と自分との相互関係の変化である。このなかには、他の人々がそれぞれにもっている状況認識の変化が含まれる。たとえばさきのヴェトナム戦争の例でいえば、他の人々がヴェトナム戦争をやめさせる機が熟しているという状況判断をしているかいないかは、自分にとっての状況判断の重要な要因であり、また、他の人々と政治的運動を展開するさいに考慮されるべき人間関係、組織関係がどうなっているかも、重要な要因である。この面を重要視しないで状況判断をした場合には、ひとりよがりでは他人からの支持を得られないどころか、逆に反発をかうような結果をもたらすことが多いのである。

第四は、主体と環境との相互関係の変化である。環境は不変のものでなく、主体の働きかけによって相互関係は必ずといってよいほど変化する。たとえば、ヴェトナム戦争反対運動の展開によって、まったく解決の余地がないとみられていた関係諸国間の関係に微妙な変化が現われ、その変化がさらに主体に希望を与えるといった変化は、よくみられることである。

このような価値判断と状況判断とにもとづいて意識的要求は出現してくるわけであるが、しかし価値判断と状況判断とは、このように明確に区別されるものではない。価値判断が状況判断に作用し、状況判断が価値判断に影響を及ぼすといったかたちで、両者は密接に関連しあっている。状況判断が価値判断に影響を及ぼす例として、たとえば世界政府を作れといった政治的欲求は、おそらく価値判断の対象として意識されればかなり高い評価を与えられるであろうが、しかし今日の状況ではまったくといってよいほど実現性が認められないために、価値判断の対象として意識もされないであろう。さきにわれわれの欲求のなかには意識されない潜在的欲求があるとのべたが、欲

求が潜在化している一つの大きな理由は、その実現性がきわめて薄いと思われることである。しかし状況認識は主観的なものであるため、実現可能であるのに実現不可能と思いこんで、大きな価値のある欲求を政治的要求としないというような場合もあることは、注意すべき点であろう。

逆に、価値判断が状況に判断を及ぼす例として、貨幣と、それと同じ大きさのたんなるボール紙とを比較させてどちらが大きいかをたずねると、価値があると思われる貨幣の方がより大きく見え、また、まずしい家庭の子供の方がゆたかな家庭に育った子供よりもより大きく見えるといったことが、実験の結果明らかになっている。この例でも明らかなように、そして希望的観測という言葉もあるように、われわれは自分がそうあってほしいと思うことを過大評価したり、それに都合よく状況を解釈したり、都合のよい情報のみを集め、都合の悪い情報には目をつぶったりして、状況判断を誤ることが非常に多いのである。

以上のべてきたように、われわれは政治的要求をするにあたって、理性的、合理的判断をしているようにみえて、実は衝動や習慣の影響を受けているほか、意識的要求といっても、価値判断のみで状況判断を怠った結果、現実無視的、実現不能的要求を出したり、あるいは状況判断に価値判断が影響されて現状追隨的な要求しか行なわなかったり、さらに価値判断に状況判断が影響されて事実誤認的な要求をだしたりしがちなのである。その結果多くの人々のあいだで政治的要求がわかれ、そしてその対立の原因がどこにあるかがわからずに対立を激化させ、共同目標を設定できないで大きな損害を蒙ることが非常に多いのである。このようなことを防ぐためには、さらに詳細に、価値判断と状況判断の過程を分析する必要があるが、それは稿をあらためて論じよう。